

図画工作科における指導の充実・改善

文部科学省初等中等教育局課程課教科調査官
文化庁参事官(芸術文化担当) 付教科調査官
国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官

小林恭代

はじめに

ある授業の一場面を紹介したい。第五学年の子供が、木材を切ったり組み合わせたりして立体を表す活動に取り組んでいる。授業が終わる時間が近付き、教師が「今日はここまでにしましょう」と全体に声を掛けた。しかし、多くの子供の手は止まらない。「この形でいいか」「パランスはどうだろうか」と、見ることで表すことを繰り返しながら、夢中になって表し続けている(写真1)。ほどなくして、顔をふっと上げた子供が、「次の時間は、ここに木をもっと付けていこう」とつぶやいた。「自分は何を頑張ったのか」を振り返り、「次はどうしていきたいのか」と見通しをもっていった。このような子供の姿が見られたのは、教師



写真1 夢中で表し続ける子供

による授業改善の取組があったからである。夢中になって取り組んだ充実感がある。そこで、資質・能力は育成される。本稿では、これまでの図画工作科の指導における成果と課題を踏まえ、指導の改善・充実について具体例を通して述べてい

きたい。

I 図画工作科における成果と課題

1 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善

今次改訂の学習指導要領では、指導計画の作成に当たって配慮する事項として、主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を図ることを示している。成果として、授業改善の視点が明確になったことで、子供の姿から指導の工夫が見直されることが挙げられる。ここで留意したいことは、この指導の充実・改善が向かう先は、「資質・能力の育成」だということである。この題材でどのような資質・能力を育成するのかを明確にし、指導と評価を一体化していくことが

大切である。冒頭で紹介した授業では、主に次のような指導の工夫をしている。

【知識の習得と活用に向けて】

木材を組み合わせて表すときの感覚や行為を通してバランスを理解することができるよう、木材を様々な形に切る時間を十分に取って、組み合わせを試したり、いろいろな方向から見たりして、一人一人の子供が全体の形にこだわって活動できるようにした。

【技能の習得と活用に向けて】

これまでの立体に表す活動の経験を踏まえて様々な種類の木材を十分に用意し、子供自身が画像や映像を使って用具の使い方を確かめながら活動できるようにした。

【思考力、判断力、表現力等の育成に向けて】

切つてできた形を組み合わせながら表したいことを見付けるようにし、ワークシートを活用して、自分が強く表したいことはどのようなことなのか確かめることができるようにした。また、材料や用具を教室中央に置き、取りに行く際に自然と友達の表現を見ることができるようにした。さらに教師は、形を組み合わせながら子供がどのようなイメージをもっているのか、表しつつあるものやつぶやきから捉えるようにし、指導に生かし

た。

【学びに向かう力、人間性等の涵養に向けて】

木材の香りや手触りから感じ取ったことを大切にし、木のよさを存分に味わいながらこれまでの経験を生かしてつくりだす喜びを味わえるように題材を設定した。授業の終わりには、互いの表現を見合せて本時の活動を振り返り、次時への見通しをもてるようにした。

このように指導の工夫をする中で、子供が「造形的な見方・考え方」を、学びの過程の中で働かせることを通じて、より質の高い深い学びにつなげることが重要である。

2 子供の学びを、視点をもって捉える

「造形的な見方・考え方」とは、感性や想像力を働かせ、対象や事象を、形や色などの造形的な視点で捉え、自分のイメージをもちながら意味や価値をつくりだすことであると考えられる。「造形的な見方・考え方」は、授業の設定や手立てが適切であったかについて振り返る視点とすることもできる。子供が感性や想像力を働かせることができているだろうか、学習の場、材料や用具、人、時間、情報などの子供を取り巻く環境はどうであったか、対象や事象を形や色などの造形的な視点で捉え、その子供にとって意

味や価値をつくりだす活動になっていったかなどを振り返ることが、授業改善につながっていく。

子供の学びは、教師が意識できるかどうかで捉え方も変わる。子供の活動の過程での姿を、資質・能力の育成の視点をもって一層丁寧に捉え、指導の充実・改善を図っていくことが今後の課題となるだろう。

主体的・対話的で深い学びの視点から授業改善を進める際には、図画工作科で育成を目指す資質・能力を相互に関連させた学習の充実を図ることが重要である。その上で、次の点についても大切にしたい。

・自分の成長やよき、可能性などに気がつき、次の学習につなげられるようにすること。

・「この形や色でよいか」「自分の表したいことは表せているか」など自分の行為や活動を振り返り、感じたり考えたりすることを大切にしつつ、互いの活動や作品を見合いながら考えたことを伝え合ったり感じたことや思ったことを話したりするなどの言語活動を一層充実すること。

・育成を目指す資質・能力を明確にし、つくり、つくりかえ、つくるという学習過程を重視すること。

論説事例⑧

各教科等における指導の充実・改善②
図画工作科における指導の充実・改善

特集Ⅱ 小学校外国語教育と中学校外国語教育の連携の充実

小学校外国語教育と 中学校外国語教育の連携の充実

直山木綿子

前・文部科学省初等中等教育局視学官
関西外国語大学教授

旧学習指導要領で高学年に外国語活動が導入され、小学校から各学校段階における指導改善による成果が認められるものの、学年が上がるにつれて子供の学習意欲に課題が生じている、学校種間の接続が十分とは言えず、進級や進学をした後に、それまでの学習内容や指導方法等を発展的に生かすことができていないといった課題を改善すべく、現行の学習指導要領において小学校外国語教育の充実がなされた。さて、この五年間に小中連携は充実されたであろうか。

1 小中連携の現状

「令和四年度英語教育実施状況調査」

結果によると、小学校では言語活動中心の授業が展開されている。一方、校種が上がるにつれ、言語活動実施の割合が減少し、小学校での学びが中学校以降で継続されているとは言い難い。また、小中連携に取り組む中学校区は、新型コロナウイルス感染症拡大以前は八〇%を超えていたが、新型コロナウイルスの影響により、調査実施を見送った翌年度の令和三年度以降は、減少している。

文部科学省は、本調査で小中連携の在り方について「情報交換」「交流」「小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定」の三点を示している。そして、新型コロナウイルス感染症により、前者二種実施の割合は減少したものの、

連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定については微増傾向が続く。加えて、「令和五年度全国学力・学習状況調査」質問紙調査での「英語の勉強は好きですか」という問いに対して、第六年の「当てはまる」「どちらかと言えば、当てはまる」という肯定的な回答は六九・二%であるが、中学第三学年のそれは、五二・三%と一〇ポイント以上の差がある。

これらのことから、外国語教育においては小学校での学びがうまく中学校につながっているとは言い難い。小学校での学びがうまく中学校につながってこそ、小学校外国語教育を導入し、その充実を図ってきたことに意味があると考えられる。

2 小中連携が充実するために

先述したとおり、文部科学省は小中連携に関して三点を示しているが、「小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定」とその活用こそが連携の最終ゴールと考える。

一般的にカリキュラムとは、環境、目標、学習内容、指導法、教材、学習評価の六点が要素と言われており、この中で、教師に大きく委ねられているのが指導法である。なお、このことに関する詳細は、文部科学省 nextchannel「外国語教育における小中連携 必要性とポイント」と題して解説動画を掲載しているの

で、視聴し確認されたい。
さて、この指導法にこそ、連携したカリキュラム作成の際のポイントがあると考えられる。小・中学校の教師が、指導の在り方と学習内容の共通点と相違点を十分に理解していることが大切である。

3 共通点と相違点

学習指導要領における外国語の小・中・高等学校の目標には、「言語活動を通して」という文言が記されている。小学校であろうが、中・高等学校であろう

が、外国語活動であろうが外国語科であろうが、「言語活動を通して」外国語教育における資質・能力を身に付けることが求められている。これが、指導の在り方としての共通点である。そして、この言語活動とは、「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」（二〇一七年、文部科学省）では、「実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う活動」を意味する」と記され、学習指導要領ではそれぞれ次のように示されている。

■外国語活動

実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、2の(1)に示す事項について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うこと。

■高学年外国語科・中学校外国語科

実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、2の(1)に示す言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行うこと。
(傍線は筆者による)

小学校では、ずいぶん豊かな言語活動が設定されるようになってきており、子供が単元終末の言語活動に向けて目的意識、相手意識をもって意欲的に毎時の言語活動に取り組む姿が見られるようになってきている。次の課題は、「言語活動

を通して」指導することであるが、これについては nextchannel に令和五年度末に掲載した「言語活動を通して指導する」ことの具体について、授業を基にした解説動画を参考にしていたきたい。

一方、相違点は、学習指導要領における「知識及び技能」に係る目標を見れば一目瞭然である。小学校においては「読む・書く」ことについては、「聞く・話す」と同等の力を付けることが求められていないことは明確である。また、文字は小学校において定着が求められるが、文法については指導することは求められていない。この「読む・書く」ことの指導の在り方については、指導者によって格差が見られることも小学校外国語教育の課題の一つである。そこで、nextchannel に「書くこと」の細かなステップを踏んだ指導の在り方の具体について授業動画及びその解説動画を新たに掲載予定であるので、参考にしていただきたい。

小・中学校教師がそれぞれの共通点と相違点を意識して指導することにより、子供が意欲的に英語を使ってコミュニケーションを図り、世界の人たちと平和な世界を築いてくれることを願ってやまない。

(なおやま・ゆうこ)

「子供が主役」の授業実践 —クラウド上で協働する学習環境—

リーディングDXスクール 事業指定校として

令和五年度、本校は文部科学省リーディングDXスクール事業指定校としての取組を行った。取組の推進に当たり、キーワードを「探究的な学び」とし、授業では、「探究のプロセス」「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」を意識し、実践した。

本事業を契機に、愛知県春日井市、静岡県吉田町へ複数回訪問し、学習者主体の先進的な取組を視察したことで、大いに学びを広げ、深めることができた。視察での学びを踏まえ、年間四回授業公開をすることで、取組の成果を県

内外へ発信してきた。本稿では、公開した授業の中から一年生と六年生の事例を報告する。

一年生：デジタルホワイトボードの活用

一年生であっても、一人一台端末とクラウド環境を日常的にフル活用し、探究のプロセスを意識した授業を年度当初より行っており、単元のゴールや本時の課題、学びの進め方をプレゼンテーションソフトに記載し「学びの手引き」として、子供と毎時間共有している(図1)。また、クラウド上のデジタルホワイトボードを活用し、子供が一人一ページずつ自分の考え方をまとめる活動も行っている。

図1 「学びの手引き」

たんげんのびーも	ねていねいしなやかにしよう。	たいりじ
きょうのめあて	むしが よろこぶ すいかをかんがえよう。	
ADJようか	おはなはんこし、おはなはいつかおはなをたのむ。	
学びの手引き		
じょうぶにしなすべし	むしやうちのむしをかんがえよう。	すいかのせいぞろい
むしやうちのむしをかんがえよう。	おはなはんこし、おはなはいつかおはなをたのむ。	すいかのせいぞろい

例えば、生活科で「虫のすみか」の設計図を作成する場面では、実際に自分が観察したことを基に、材料等の必要な情報を教科書や図鑑から集め、工夫したいポイントを整理した。子供は、友達が作成しているページをいつでも

参照できるので、他の人のやり方を取り入れながら作成することができた。このように、生活科の学習の中で、本や他の人の考え方などから情報を収集する力も身に付くようにした。

この授業では、教師の全体指示は、設計図の作り方の説明に注力し、授業のほとんどは子供が自ら思考し、表現する時間になるようにした。教師はファシリテーターに徹し、身近な生活に関わる見方・考え方を働かせられるような声掛けを心掛けた。また、九月の実践ということもあり、端末への文字入力、手書き入力とローマ字タイピングから子供が選んでいたが、すでにタイピングで入力している子供も少なくなかった。短時

埼玉県久喜市立久喜東小学校長

富山司



間でより多くの思考を文字にできるため、アウトプットの手段としてタイピングによる入力は効果的であると感じている。

六年生：チャット機能・表計算ソフトの活用

六年生でも、子供が主体となり探究的な学びを進められるよう、学習支援ソフトで単元の流れや本時の学びを授業開始前に子供と共有している。どのようなゴールに向かい、どのように学んでいくかを見通せることで、子供は自分にとって必要な資料等を授業に向けて準備するようになった。

学習計画の作成においては、単

図2 チャットで気づきを共有



図3 表計算ソフトで成果物を一覧化

学習計画	単元	単元名	単元内容
1	1	1	1
2	2	2	2
3	3	3	3
4	4	4	4
5	5	5	5
6	6	6	6
7	7	7	7
8	8	8	8
9	9	9	9
10	10	10	10
11	11	11	11
12	12	12	12
13	13	13	13
14	14	14	14
15	15	15	15
16	16	16	16
17	17	17	17
18	18	18	18
19	19	19	19
20	20	20	20

元の内容や子供の実態に応じて、教師が適宜支援しながら、子供自らの力で計画を作成しており、自らの学びをマネジメントする力を育成することもねらいとしている。

授業では、子供は自らの課題解決に向けて、個別で学習を進めるだけではなく、必要ときに必要な仲間の力を借りながら協働的な学びを進めていくことを大切にしている。教師は学習の場や学習方法を限定せず、子供に委ねている。

例えば、社会科で、武将（織田信長・豊臣秀吉）について調べ、プレゼンテーションソフトで

まとめる「推し武将見つけ」の活動の場面では、子供はチャットを活用し、探究的に学ぶ中での気づきや疑問をつぶやき、仲間と交流することで、学びをより深めることができた（図2）。一人一人の成果物のURLは表計算ソフト上で一覧化（図3）され、子供全員に共有されており、仲間の学びの過程を参考にすることもできた。自分に必要なタイミングで様々な情報にアクセスできる環境をつくることで、子供は自分に合った学び方が選択できるようになった。

まとめ

本校では、子供一人一人が設定した課題解決に向け、必要ときに必要な思考を働かせることができる学習環境の整備に努めている。

「子供が主役」の授業実践に向け、舵取りを子供一人一人に任せようとする学習経験を積ませながら、これからの予測困難な時代を生きていく上で必要な資質・能力の育成のために、今後も試行錯誤を続け、学校全体で取り組んでいきたい。（とみやま・つかさ）

GIGA StuDX

推進チームからの講評

「子供が主役」の授業づくりを目標に掲げ、一人一台端末とクラウド環境を日常的に活用した授業実践が報告されています。子供が主体的に学習に取り組めるよう、授業開始前に本時の目標や使用する資料等をクラウド上で子供と共有する工夫がされています。

授業においては、各教科等の資質・能力の育成とともに、学習の基盤となる資質・能力のうちの一つである「情報活用能力」の育成を目指した取組が行われています。このような取組を一年生から系統的に行うことで、子供が端末やクラウドの特性を体験的に理解できます。また、教師は、子供が端末とクラウドを活用することを前提として授業改善を行うこととなります。今回報告された実践は、どの学校でも使用できる汎用的なクラウドツールが活用されています。各地域においても、学校の実態に応じて、それらを活用しながら、子供に学びを委ねる授業にぜひ挑戦してほしいと思います。

■特集…環境を通して行う教育 — 魅力ある環境づくり —

環境を通して行う教育 — 魅力ある環境づくり —



鳴門教育大学大学院教授
佐々木晃

はじめに

幼児は自ら周囲の環境に働きかけて試行錯誤したり考えたりして、発達に必要なものを獲得しようとする。幼児と共に遊びや生活を創造して、幼児の発達を促していく保育の営みは「遊びはごちそう、学びは栄養」という表現がふさわしい。環境を通して行う教育の肝心は、幼児の環境への主体的な関わりを大切にしながら、そのごちそうを作る食材、つまみ環境の中になかなる教育的な価値をど

う含ませて構成し、さらに再構成していくかとなる。

1 「幸福な空間から面白い空間へ」

以前、私は県の指導主事を拝命して五〇件を超える学校訪問を行っていた。「この園の雰囲気はとてもよい」「幼児が楽しそうに遊びが充実している」と感じた園には五つの共通点があった。安心安定できる環境、表現できる環境、探究できる環境、創意工夫できる環境、チャレ

2 幼児にとつての魅力ある環境とは？

ンジできる環境である。もちろん、学期や季節による環境構成の意図や重点といったものの濃淡はあるが、いずれの園にも、この五つの要素がバランスよく存在していた。環境づくりは、まず、子供のウェルビーイングが保障される幸せな空間をつくり、探究や表現へと導き、面白い空間を共に創造していくビジョンをもつことが重要である。

鳴門教育大学附属幼稚園にも高価な遊

具やICT機器がないわけではない。しかし、それらよりも素朴な砂や泥・土、植物や空き箱、段ボールや木片などを選んで嬉々として遊んでいる幼児の姿には驚かされる。やはり幼児は「遊ばされるより遊びたいのだ」「能動的なクリエイターなのだ」と感じ入る。

ところで、幼児たちが関わる環境を注視すると、幼児が環境に働きかけているのか、環境のもつ魅力が幼児たちを誘い入れているのが判断しかねるような、スリリングで複雑な相互性のある状況の構造と特性があることに気付かされる。幼児を遊びに誘い、幼児たち自身によって遊び継がれながら、より魅力的な環境となっていくものを、鳴門教育大学附属幼稚園では、遊びに誘う環境「遊誘財」と命名して研究している。

3 個々の環境の特性を探るために「遊びの面白さに触れるための三つの視点」

私は、ある種の緊張感をもって幼児たちの遊びに関わっている。安易に「すごいねー。素敵」とリアクションすると、「何が? どこが?」とさらに深みを求められる。「かわいい」など言おうものなら「稚拙な表現」となじられ、「やばーい」など口にしようものなら、「専門家としてやばいかも」と突き放されると私は恐怖する。例えば、「泥・土」などというような曖昧な環境の捉えでは話にならない。「遊び」や「関わり」などというふんわりした観察では幼児理解に至らない。幼児の遊びを観察すると遊びのテーマやものの素材、そしてそれを使って動かしたり表現したりする技法があることが分かる。

例えば「泥・土」という同じ素材でも体験の自身は異なる。写真1は三歳児が雨上がりの園庭で、チョコケーキを作っている様子である。手触りの気持ちよさを感じたのか、次は素足に泥をかぶせている。この場で教師はどんな表現で幼児と応答するだろうか? 私なら「まあ、気



写真1 どころこ



写真2 泥団子

持ちよさそうね。私もやってみよおつと」と泥の感触を楽しむというテーマに沿ってアプローチし、幼児の見付けた気持ちよさを体感する技法を真似て、感覚を共感するだろう。

写真2は、五歳児が仲間と競い合いながら、堅くしてまん丸でピカピカの泥団子を作ろうとしている様子である。ここでは土や砂の性質や堅くしてまん丸の泥団子づくりのための構造や技術的な工夫を認めたり讃えたりする言葉を掛けるだろう。

このように、遊びや環境には固有の魅力があり、その幼児なりの経験や発達がその魅力の引き出し方に関わってくる。この相互作用を読み取りながら、遊びの展開に応じて、環境や状況を再構成していくかが、教師の腕の見せ所となる。

4 遊びに誘う、魅力ある環境の構成のために

環境の「設置や設定」だけで保育は始まらない。もちろん「準備や用意」だけでは幼児を遊びに誘い、学びを促すに十分ではない。「環境の構成」とは、保育に必要ないくつかの要素を一つのまとま